

私の半生			
元県小学校国語研究会副会長			
宗	形	虎	男 ②

●赤木小③

虎桜（とらざくら）

自然への愛、緑の豊さを桜の木に託し、明日の子どもたちへ伝えたい。切られるはずのこの桜の木は、第十七代宗形虎男校長の教職生活四十年の最後を飾るにふさわしい情熱と努力によって救われましな。宗形校長の功績を後世に残すため、この桜を「虎桜」と命名します。

昭和六十二年四月十六日

赤木小学校PTA

退職直後の昭和六十二年度PTA総会で感謝状を受け、その後役員によって校庭南側

の土手に咲き始めた桜二本の前のフェンスに取り付けられたのが、前記の鉄板の文字である。

学校南側の土手に、戦時中の数多い横穴防空壕があったこと、それが長年の風水害によって上の住宅街が陥没の危険にあることも承知していた。いよいよその土手の補強工事をするので、県の土木部の方々が、工事図持参で校長

せてくれた。植物でさえ生命あるものは懸命に生きていく。小枝を折ったり切ったりしないで、先輩の残した宝物を大事に育てよう」等々話したものだ。

自分より弱者にあたるもの、保護を受けなくてはならないものに対しての、思いやり、いたわりの心を強めようと、具体例をとりえながら常に努力してきた。そのような

命の貴さ伝える「虎桜」

伐採の撤回懇願、生き残る

室にあいさつに来てくださった。

図面で説明を受け「ぜひ協力をして」と言われて困ったことは、土手の樹木はすべて伐採してしまふということだった。私は在職中、折にふれて動植物の生命の豊さ、大切さを話した。特に校庭での朝会時には、南側土手にある樹齢二十年余の桜を指さし「ああ今年もまたきれいな花を咲か

ことから強く事情を説明し「せめてあの桜二本だけでも残してもらえないか」と頼んだが「工事の設計図もできていることだし無理だろう。一応、上司と相談してみよう」と係員たちは帰っていった。その後二度「この設計図で協力してくれ」私は私で「たかが樹木二本と考えないでほしい」等々と応対し、教育の場を理解して校長としての私

の信念を通してくれるようにと必死に懇願し続けた。しばらくして上司ともども係員が「学校の熱意に負けた。桜の木付近の工事の設計図を変更した。工事費は増加することになるが」と、来校されたのである。

役所にも素晴らしい人物がいた。二本の桜の生命が救わ



満開の「虎桜」

れたのだ。私は強い感動を受け、深く頭を下げたものだった。そのような経過をPTAが知り、私の固辞するのにもかかわらず、PTAの総意として残された二本の桜に私の名前の一字を用い「虎桜」と命名したのである。

考えてもみなかった身にある光栄に、内心じくじたる

ものがあつたが、当時の事情を知る職員が、今年の「虎桜」はこんなに見事に開花しましたなどと撮影して届けてくれたり、さらには退職して二年後の春、六年女児の手紙に感謝したり。

それには、（前略）私たちは、小学校最後の運動会を前に鼓笛の練習に励んでいました。何回も何回も校庭を回りながらがんばっています。が、演奏曲を忘れることがあるのです。私はその時「虎桜」を見ます。するとすぐ思い出すのです。…「虎桜」はやさしく見守り、励ましてくれているのです。（後略）以上のようながことが書かれていた。

私の人生哲学は「出会いとさよなら」。退職時、この女兒は四年生であった。二年の経過後も、この子は「虎桜」を通して、私と出会っていてくれたのである。終生「子ども」の心に生き続ける教師に「を目標した私にとっては、うれしい限りであった。」

（題字は筆者）